



## 卒後から今日までを振り返ってみて

千葉大学社会精神保健教育研究センター・治療・社会復帰支援研究部門 教授 関根吉統 (9期生)

初冬の候、琉球大学医学科同窓会の皆様におかれましては、益々ご清勝のこととお慶び申し上げます。本年4月より千葉大学社会精神保健教育研究センター、治療・社会復帰支援研究部門の教授に就任致しました関根吉統と申します。寄稿の機会を頂きましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私ですが、卒後、浜松医大精神医学教室に入局致しました。臨床研修が始まり、精神科医として楽しく働けることだけで幸せを感じる日々が続いておりました。その中、1年目の秋、指導教授より大学院への進学を勧められました。大学院とは申しても、それすらどの様なものかわかりませんでした。ましてや、論文のろの字も知りませんでした。即座に進学することを決意致しました。

そこからでございます。遊んでばかりいた私が、どうしたことでしょう、臨床と研究に没頭するようになりました。当時の習わしは厳格で、17時までは臨床、その後研究というものでございました。当然、深夜の帰宅が続きました。土日はもとより盆も正月も臨床と研究に専念致しました。そのような中、初めて書いた症例報告が、インパクトファクター(IF) 5点超の雑誌に受理されたとの手紙が米国より届きました。その晩は、それまでの苦勞が想起され、涙が止まらなかった事を今でも鮮明に記憶して

おります。これを機に、快進撃が始まりました。学位論文がIF10点を超す雑誌の表紙を飾りましたのを皮切りに、論文の量産体制に入りました。大学院を修了後は、助手に任命され、研修医や学生の指導をする傍ら、研究成果を産出し続けました。気が付きましたら、学術賞等を7度受け、獲得したIFは合計300点を超えておりました。この間、NIH客員研究員として米国留学も果たしました。

教授となりました今日、競争的資金獲得やスタッフ統括といった部門運営という重責に直面しております。また、文科省の病態解明研究、厚労省の多施設共同臨床試験などを任されておりますが、重鎮でおられる先生方を私のような若造が先導する重圧は想像を超えておりました。経験せねば知り得なかったこれらの事実をもちまして、改めて先輩教授先生方のご功績に対し深い敬意を表する次第でございます。

未筆ながら、ご指導賜りました浜松医大、大原健士郎名誉教授、同大、森則夫教授、尾内康臣教授、千葉大学、伊豫雅臣教授に心より感謝申し上げます。今後は、精神障害の病態解明に加え、その成果を応用した新たな治療法、新しい社会復帰支援法の開発に邁進する所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。